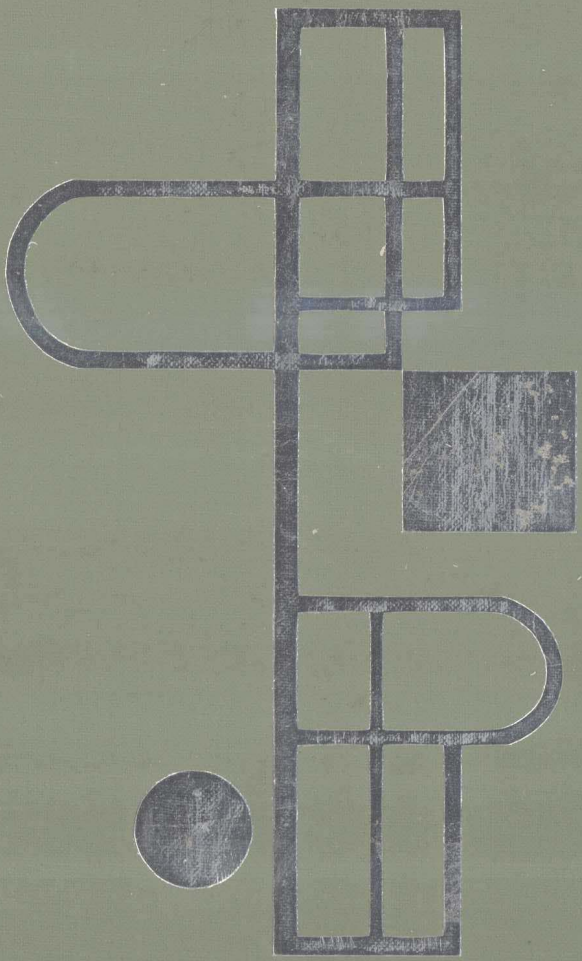
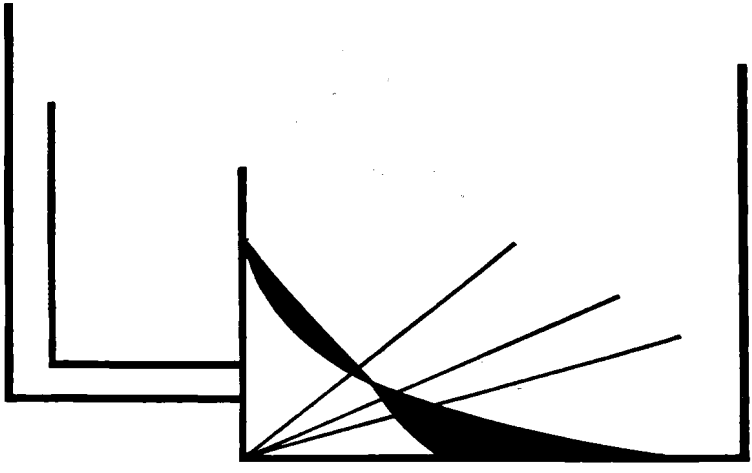


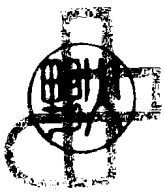
火野葦平集

新選 現代日本文學全集
19



筑摩書房版

新選 現代日本文學全集 19



火野葦平集

昭和三十四年四月五日 発行

著者 火野葦平（ひのあしへい）
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行者 古田晁
東京都青梅市根ケ布三八五

印刷者 山田一雄
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所 筑摩書房
〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京一六五七六八

製本所 有限会社矢島製本
印刷 株式会社精興社
整版 株式会社精興社

火野葦平集　目次

青春と泥濘……五
黄金部落……一〇四
赤い国の旅人……一七四
魔の河……二四四
琉球物語（抄）……二〇六
歌姫……二〇六
珊瑚座……二二八
山原乙女……二三六
恩納奈辺……二三四
ちぎられた縄……二四四

牢　獄……三六七
島原半島……三九一
金銭を歌う……四〇四
火野葦平について……青野季吉　四三
解　説……河上徹太郎　四二六

装幀　恩地孝四郎
　　恩地邦郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

火野葦平集

小さき盲目の魚よ、汝は神妙不可思議なる賢者なり。
小さき盲目の魚よ、なにものが汝の眼を奪い去りたるや？
汝の耳をひらきて我が願望をきき入れよ、我に愛しき人をもたらせ、小さき盲目の魚よ。
（ビューリーの魔魚の呪文・印度古譚）

第一章　塩分の価値

二十二度目の瀬振りであつた。家というものを忘れてから久しい。敵の足音や声さえもきくことのあるこの最前線の屯営は、ときどきはげしい雨にたたかれ、しばらくは無為にして退屈な日が流れた。敵からの攻撃もないかわりに、こちらからも攻撃する力を失つていたからである。あの凄惨な最後の日が来るまで、陣地は不気味な静謐のなかにあつた。

深いジャングルの一隅である。地図によつても正確な地点を探すことは困難であつた。地名など、もとよりなかつた。任務をあたえられてこの地点に瀬振りをかまえてから、二十日以上になるが、こちらからの連絡以外、本部からはなんの指示もなかつた。

一箇中隊といつても、四度目の中隊長代理、今野軍曹以下三十七名、三カ所に分哨を配置し、食糧探しの一隊が出てゆくと、中隊本部は閑散だ。兵隊は深い森や藪にのまれてしまつて、まつたく人影を見ぬことも少なくない。兵隊も少なかつたからであるが、兵隊が疲れていて、うろうろと腹減らしするよりは、寝ている方がよいからであつた。二日も三日も横になつたきり動かぬ兵隊も何人かある。ここに一人例外なのは団栗という綽名をつけられている田丸兵長のみ、戦友たちからもの好きを笑われながら、熱心に毎日動く。

「おい、団栗、たいがいで止めといた方がええぞ」

戦友が忠告するとへらへらと笑つて頭を掻くが、一切採用しない。そして、一日にかならず四回、午前二度、午後二度、森のはずれにあつて、どんなところでもすぐ名をつけることの好きな兵隊たちが、「印度公園」と呼んでいる高台へ出かけてゆくことを欠かさない。休むのは爆撃と雨と任務とのときだけだつた。そこまでは百米足らずなのだが、往復二百米、四回八百米も一日にむだな行軍をするのは馬鹿の骨頂、もともとあいつは賢い方ではなかつたが、今度のような困難な戦闘つづきで、いよいよ頭がどうかなつた、たれからもそう思われた。いわれた。ことに田丸のマラリヤは慢性で、ここの悪性マラリヤは頭に来るものが少なくなかつたのである。専門家である軍医少佐が発狂して、敵の偵察がやつて来たとき、自分の赤褌をぬいで下からふりまわし、げらげら笑いころげながら谷間に落ちた話をきいたのは、まだ一週間にもならぬ前だつた。

稲田兵長はからかいと心配と半々で、たびたび、

「おい、団栗、お前、気はたしかだろうな。……へたばらんようにしてくれや。お前の足の強いのはよう知つとるが、なにしろ大行軍だからな」

すでに数年間、中国を処女戦場として、各地を転戦しつつ数千キロを歩いて来た兵隊たちである。数万キロということもできようか。その兵隊たちがわずか八百米の行軍を大事業と考えているのであつた。剽軽な表現のなかに苦渋があつた。笑いとおどろきと、嘲りと、なにかへの怒りと、――しかし、現実はいま八百米の記録保持者田丸兵長を、戦場のうすよごれた英雄としている。たしかに、いまの中隊中で、命令受領の江間上等兵をのぞいて、毎日八百米の行軍をしてたおれないと、断言できる者はおそらくなかつた。

「なんで、お前、そんな馬鹿な腹へらしするんだ。よつぽどええことがあるとみえるな」

「うふふ」

田丸は笑つて、答えなかつた。

まだ本格的に雨季に入つてはいなかつたが、

そのきざしはあらわれていた。近ごろでは晴雨半々くらいである。降りだすと山も木も草も土も砂もひとかたまりに押し流すようなはげしさで降つた。雨のなかに立つていると、小石をぶつつけられるように痛かつた。降ると全身ずぶ濡れになるが、止むと強烈な太陽の直射ですぐ乾く。天候の急襲は気まぐれで、ほとんど目まぐるしい。さして地上に風は感じられないときでも、青空にたちまち雲があらわれ、雲が去り、雨が降り、雨が去る。夜などでも、靄雲がとじこめ、星のひと屑も見えず、また雨かと思いながら、靴の紐を結んでいるうちに、空には無数の星がちりばめられ、皓々たる月が出ている。女心と秋の空どころの騒ぎではない。

印度は暑いと簡単にきめて来た兵隊たちは、このインパール平原に来ていささか戸まどいした。三月はじめ（昭和十九年）この作戦開始以来、ビルマから国境を越えて印度に入つたが、チン丘陵の最高峰のケネデ・ピイク（八八七一呎）で一夜を明かしたときには、はげしい寒さのために眠ることができなかつた。ふるえながら、歯をがちがち鳴らして過ごした。腐木となつた不気味な森林を、凩のような烈風が鳴らす。吹雪を思わせるような、まるで北国の寒夜であつた。火をとつて煖をとつたが、印度に来て焚火をしなくてはならぬとは思いもかけなかつた。前進してインパール盆地に入ると、ロクタク湖の水面すら海抜二千呎以上あり、現在位置している場所でも、四千呎を下らない。敵の飛行機から遮断されている瀬振りは、ほとんど陽の目を見ることがないので、雨に濡れれば乾くことがなく、いつも土が湿つていて、快適というわけにはいかなかつた。そうして、夜は冷えた。

ここに来てすぐは、とりあえず天幕で住居をつくつた。上空から見えないようにするため、できるだけ樹木や藪の深いところをえらばねばならなかつた。百尺近く繁茂した巨樹が立ちならんでいて、樹の根に庵を結び、屋根に樹枝や竹をのせて置けば、まず上からはわからない。のちにはすこしずつ工夫して棲みよくしたが、原始的であることに変りはなかつた。孟宗竹に似た竹林が多く、その竹が役に立つた。それでも住居はすべて太陽から隔離されている。陰鬱でじめじめし、いつかものの腐敗したような饐えた悪臭をはなつようになる。床をすこし高くしてはあるが、寝ると気持わるく湿気が身体にしみる。蚤はいなかつたが、虱が簇生した。身体が腐る思いなので、暇を見ては日向に出る。太陽の直射は強烈で永くは立つて居られない。陰陽の温度の差が極端なのだ。身体が弱つているので、すぐ日射病になるのだつた。

暑さに平気なのは印度兵だけである。二人中隊に配属されていた。それでも陽の下に出ると、まぶしそうに眼を細め、漆黒の手をかざして、顔の上に日かげをつくる。彼等の黒さには、相当に日焼けして赤銅の顔に眼ばかりぎょろつかせている日本の兵隊たちもかなわない。ティディムが前進基地であつたころ、国境の民族たるチン人の赤ん坊を見て、それが大して黒くないのを見て郷愁をおぼえたものだつた。ところが大きくなるにつれて黒くなるらしかつた。印度兵に芋をむかせたり洗濯させたりすると、その手の黒さがつきはせぬかと気が気でなかつた。配属になつて来たとき、握手を求められて、思わず手をひつこめたのは今野軍曹である。

「印度人でも暑いか」

陽を避ける印度兵に兵隊がからかい半分できくことがある。そんなときには印度は暑いところときめて来て、印緬国境を越えてから、寒さにふるえたことをもう忘れているのである。その失礼な質問に対して、すこし生意気なところのある、おしゃべりの炊事係りハリハル一等兵は、顎をしゃくつた気取つた様子で答える、次のような意味のことを――あなたがたは中国の戦場から来た。しからば漢口を知つている筈である。漢口は中国でも、いや世界でも有数の暑熱の都会だ。屋上から雀が焼けて落ちるという諺さえある。中国人はすべて表現を大げさにするので、いうほどではないとしても、漢口で永く巡査をしていた自分の友人が、夏になるとパンジャブ地方にかえつて来たものだ。無論、避暑の目的で。

印度語のわかる者は兵隊のなかにはいなかつた。たつた一ついつか皆が憶えた言葉がある。ジャイ・ヒンド――これは印度の勝利という意味だそうだが、印度兵は出あいがしらに、かな

らず右手をあげて、両方から、「ジャイ・ヒンド」といいあう。正式の挨拶である。のちには印度兵と日本兵と出あつてもいいかわすようになつた。印度語は通じないので、ハリハルは英語で話すのである。ところが中隊でもどうにか英語のわかるのは今野軍曹と小宮山上等兵としかいない。中学校で英語の教師をしたこともある小宮山の方は、自分でもよく話すことができた。ハリハルは日本語はほんの片言しかしやべれなかつたが、シンガポールで日本人の医者の家で三年近く庭番をしたことのあるというババ一等兵の方は、片言ながら、ひととおり日本語を話せた。こういう印度兵が他の部隊にも通訳がわりに配属になつていた。ハリハルは流暢な英語で漢口の話をすると、ひとりで愉快そうに笑つた。のちには哀れな死にかたをしたこの印度国民軍の若い兵隊、（彼は二十三歳、ババは二十六歳）は、いつもたれも面白がらない警句を吐くのが好きだつたが、なにごとでもまともないいかたをせず、兵隊たちを歯がゆがらせた。愚鈍ではあつたが、陰日向のない正直者のババの方を兵隊たちは好いていた。ババは、印度人でも暑いか、ときけば、おどおどとはにかんだ様子で、やつぱり暑いと答えるだけであつた。しかしながらこの印度の太陽の強烈さは、もう永いこと欠乏している塩の生産に寄与するところ多大であつた。兵隊たちの製塩業はすこぶる奇抜な方法によつていた。

塩分は人間に欠くべからざるものである。動物でもそうだ。そうして、その塩分の欠乏のために、どの部隊も馬が使用に耐えなくなつているのである。一日に一度、命令受領にゆく江間上等兵が、わずかに、この中隊が忘れられていないということを証明する一本の紐であつた。そうしておしやべりの江間上等兵は、かえつて来ると、退屈している兵隊たちに、自分の見聞を細大もらさず報告した。塩の欠乏のために馬の腰が抜けているという話をしたのも彼である。

東北生まれの江間は特別に訛のはげしい言葉で、大きい眼をうるさいほど瞬きさせながら、身ぶり手まねをまじえ、その癖、こんな話したつて仕様がないんだというように、なにかひどくつまらなそうな様子で語る。

「もう輜重隊の馬なんて、使いもんになるのは何匹もいねえや。みんな、腰が抜けてな。可哀そうに、役に立たんようになると、食糧にされてな。これまで可愛がつたのに食うなんてのは情においては忍びんが、背に腹は換えられんのだろう。塩不足で、腰が弱くなつてるんだ。坂道はもとよりのこと、平地でもすぐ後肢をついて全然歩けんらしいんだよ。……輜重隊の戦友が話しとつたがな、馬の方が人間よりよつぽど賢いぞ、つてな。どうしてやときいたら、馬の奴とつくの昔に塩気をとる工夫をおぼえてやがるという。人間より馬の方が塩分が大切なんだ。ならんで行軍するだろう。すると強い陽に照りつけられて、身体中に汗が出らあな。そいつを尻尾で左右、ばさつ、ばさつとたたくんだ。そら、蠅を追うときやつてるだろう。あれをくりかえすんだ。すると身体の汗が尻尾にくつつく。そいつを舐めるというんだ。うん、いや、自分で自分の尻尾は舐められん。前の奴の尻尾を舐める。ひとのを舐めるかわりに、自分のも舐めさせる。うまいことを考えやがつたな。ところが、そこが畜生で、限度を知らん。あんまり強くしやぶりすぎて、尻尾の毛が抜けてしまうんだ。輜重隊の馬の尻尾が古箒みたいになつているのを気づかなんだかつて、戦友はいうんだよ」

「ふうん」感にたえたように首をひねつた小宮山上等兵が、くすぐつたそうな顔つきになつて、

「ちよつときくがね」

「あん？」

「その話はわかつたがな、すこし腑に落ちないことがあるんだ。順々に前の尻尾をしやぶるわけだろう？　そうすると、一番前の馬はどうするんだ。しやぶられるばかりで自分がへたばるじやないか」

「それだよ、俺も輜重隊の戦友にそれをきいたんだ。そしたらな、そりやしやぶられ損だつていやがつた。平等にするなら円陣をつくらにやならんもんな、そんなこたできねえや」

「そんなら、最後尾の奴はしやぶり得か」

「そういうわけだな」

皆笑つた。空腹から出たぼそぼそした笑い声だつた。しかしこれは寓話ではなかつた。この

たわいもない報告は兵隊たちにひとつの絶望的な勇気をあたえた。それから兵隊たちの奇妙な製塩作業が始まつた。敵側から遮断された土堤の蔭を飛びまわるようになつたのである。

早朝から、日没にいたるまで爆音が絶えることはない。一日に十度以上はこの瀬振りの上も通過するので、そういう運動も対空監視哨つきだ。運動中も何度も待避した。白いものを見せることは絶対禁物である。また上空に敵機がいるときにちよつとでも動くと発見される。一人でも見つけると敵機は執拗に銃撃をしたり、爆弾を投下したりする。日本軍の飛行機はほとんどあらわれず、爆音がすれば敵機にきまつていた。機数の不足と、長距離なのと、アラカン山脈を境とする気象源の相違と、対空火器の熾烈さと、敵航空兵力の絶対優勢さとによつて、日本航空隊のインパール爆撃は容易の業ではなかつた。ビシェンプールをはじめとするインパール周辺要地の対空陣地には、おびただしい高射砲が配列され、襲撃に対しては如露の水をさかさにして浴びせるような猛烈な火力をうちあげる。その音は太鼓を乱打しているようにきこえた。ところが、日本の飛行機がほとんどやつて来ないので、敵の対空陣地は閑散のため高射砲は法にない活躍をする。砲身を水平にしてこちらの地上陣地を射つて来るのである。日本軍は逆であつた。頭上に掩いかぶさる敵機の跳梁に対して、前線にはほとんど対空火器がなかつた。やむなく小銃射撃を試みるがなんの効果もあるわけはなかつた。傍若無人な敵機の攻撃に歯噛みしたある山砲の大隊長は、砲身を上空にむけて発射した。敵機は落ちずただ陣地を暴露したにとどまつた。爆撃機戦闘機、各二十機ほどがたちまち襲来し、一門を残して全部の大砲と、多くの兵員とを失つた。そうして、そのときお附武官をしたこともあるというその名高い大隊長は戦死したのである。味方の重砲八門もモイラン近傍まで進出していた。しかし、射撃はほとんど行わず沈黙をまもつている。弾丸の欠乏もあつたが、射撃を始めるとたちまち数十機の戦闘機爆撃機が飛び立つて来るからである。二三発射つと、すぐに陣地変換をしなければ危険であつた。しかし上空から見れば砲車の轍のあとは歴然としていて、進入路は隠しようがなかつた。陣地は砲弾と爆撃とに日夜さらされた。しかしながら、この八門の加農砲は遂に日本軍がインパール平原から撤退するとき、自らの手で破壊し去るまでは、不思議と二門の被害を見たにすぎなかつた。

敵の砲撃はすさまじかつた。こちらが一発射てば百発のおかえしが来た。霧に掩われることの多い盆地の未明から、朝の挨拶をするように砲撃が始まる。つづけさまに射ちだされる砲弾は箒ではくように、遠距離から逐次前線へちぢまつたり、左右に振子のように動いたり、気まぐれに豆でもばらまくように散らばつたりした。太鼓をたたくように射ちやがるなと呟く兵隊の譬喩は、太鼓だつてあんなに早くはたたけんよという、もう一人の兵隊によつて否定される。その音はときに連続して風の音のようにきこえたり、波の音のようにひびいたりした。雨季近くの空にとどろく雷鳴ともまごうたり、雷鳴と砲声とが入りみだれたり、いつしよになつたりした。砲声の間に、高射砲や、戦車砲や、機関銃の音がまじる。戦場はこのようなすさまじい銃砲声によつて明け暮れしているのに、実際はほとんど動きを見せず、いわゆる交綏状態となつて、じりじりと最後の場へむかつてつきすすんでゆく凄壮な鬼気を、表面はおだやかな全戦線の底に不気味に孕んでいた。

こういうときに、今野中隊の兵隊たちが、そのような戦場の空気などはおかまいなしに、土堤の蔭を飛びまわり始めたのである。みんな裸であつた。

日焼けした兵隊たちの身体は頑丈であつたけれども、正常な姿をとどめている者は稀であつた。痩せた胸に肋骨をむきだしている者が多かつた。中隊は三十七名いるとはいえ、分哨その他任務についている者をのぞくと、中隊本部にいる者はほとんど十名内外にすぎない。チンドウイン川を渡河して以来のジャングル戦闘で、最後まで健康を保持し得た兵隊は指を折るくらいしかなかつた。まずほとんど部隊の大半がマラリヤにおかされた。しかも、その大部分は悪性で、短い時間に命をとられ、あるいは高熱のため脳をおかされて、発狂する者も少なくなかつた。蚊が飛んでいるという普通のいいかたが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あてはまらないほど、蚊の密集しているところが多かつた。蚊の幕のなかに人間が入るといつた方が適切なのだ。蚊に食われないためには、歩いているときでも坐つているときでも、横になつているときでも、つねに手を動かし、あるいはタオルでもふりまわしていなければならなかつた。踊つているように滑稽であつた。行動中はいちいち蚊帳を吊ることができない。外被などを頭からひつかぶつて寝ていると、どこからか、すき間からもぐりこんで来て、顔や手を刺す。蚊よりも一層厄介なのは砂蠅である。この地方特有といわれるこのうるさい蠅は猛毒をもつていて、食われた箇所はたちまち紫色に腫れた。膿をもつこともあつた。蚊帳を吊つてもこの微細な蠅はほそい目をとおして入りこんで来る。また密林のなかには兵隊たちを嚙む為体の知れぬいろいろな虫がいた。食われたところを掻くと破れて血が出る。そうするとその汁気のたまつた傷の部分にばかりたかつて刺す陰惨な羽虫があつた。兵隊たちの顔や手や、露出した部分は、黒くよごれ、紫色になり、凸凹だらけになり、奇妙な斑点ができ、原形をとどめている者は少なかつた。しかも、食糧の欠乏のために、痩せ、マラリヤのために皮膚は黄味を帯びて、しなびた大根のように生気に乏しかつた。顔だけが青黒く陽にこげて、首だけとつてつけたように見える。アミーバ赤痢（この山中には意外に清流が多かつたが、その水は悪質で、赤痢菌を含んでいた）にかかつている者もあり、脚気も居り、負傷して繃帯をまいたり、絆創膏をはつたり、アカチンをつけたりしている兵隊もあつた。

こういう兵隊たちが、裸になつて、ぎらぎらと照りつけて来る太陽の下を、円陣をつくつて、ぐるぐると駈けまわるのである。走る気力のないものは、足をふんばつて立ち、両手を身体といつしよに強く動かして、体操をした。激動することが必要なのだ。彼らの多くは靴をはいていなかつた。チン丘陵の山岳地帯を突破するときに、靴はすつかり破れてしまつてはきすてるとかわりがなかつた。裏のはんばりがはげれば板片をあてて、紐や葛で巻いたり、片方が役に立たなくなれば一方だけ地下足袋をはいたりした。その地下足袋も酷使のため用をなさなくなつた。跣足ではあぶないので、兵隊たちは新案特許のはきものを工夫した。兵隊は工夫の天才といわれる。竜舌蘭、林投、芭蕉、芋というような植物の葉をぐるぐる巻きにして当座の間にあわせた。器用で根気のよい兵隊は、それらの葉から繊維を引きだして、草鞋を編んだ。不器用で、不精な兵隊はいつも跣足で怪我ばかりしていた。いま、このジャングルのなかで奇妙な運動をしている十二人の兵隊たちの足を見れば、原形は失つているがともかく靴といえるもの四、草鞋五、跣足三、という具合である。

「爆音」

対空監視哨がどなると、兵隊たちはあわてて藪のなかに逃げこむ。どなるというけれども、腹に力がないので、叫ぶときにはあらかじめ両手で臍の上をしつかりとおさえなくてはならない。声が腹にひびいて痛いからだ。それから、あおむいて鮒のように口をあけるが、かすれたように声にはならなかつた。監視哨の吉崎一等兵は、人なみ以上に図体が大きいので、自分でもおかしくなつたように、困つたような、てれた苦笑を浮かべた。爆撃機の編隊が上空を通過する。

飛びまわる兵隊も、空腹と病気のため、とても過激な行動には耐えられなかつた。わずか数分なのに、もう息切れがした。

「ようし、止めえ」

糸島伍長が号令をかける。みんな、おのおのの位置にとまる。二人ほど、尻餅をついた。

「しやぶりかた、始め」

操典にない号令が発せられる。兵隊たちは自分の腕を舐め始める。肩からずるりと手の甲まで舐めてゆき、また肩まで舐めかえす。二の腕や、手の甲を乳をのむようにして、ちゆつちゆつと吸う者もあつた。左右の手をかわるがわる舐めた。うまい、うまい、という者もあつたり、畜生、とか、はあはあと肩で息をついたり、むせている兵隊もあつた。舌のとどかない部分は胸や腹や背を平手でなでて、そのべとつく掌を吸うのである。

糸島伍長はとうきびを食べるような具合に、腕を裏表にくるくるまわしながら、しやぶつていた。兵隊たちは顔見あわせて、げらげらと笑

いあつた。笑つてはしやぶつた。この正気とは思われない行動も、みんなの心のなかによく通じあつていて、その弱々しくはあるが、一種けたたましい笑い声には、自嘲のひびきなどはなかつた。戦場でともに暮らしたものだけにわかる寛大にして飄逸な感情が流れていた。

異様な味わいであつた。汗をだして塩気をとるための試みであつたが、それは塩の味ともちがつていた。汗が淋漓とほとばしるほどでもなく、不健康な青黒い皮膚がややじつとりと濡れている。

団栗といわれるちんちくりんの田丸兵長は、腕も短かかつた。すこし走つたのにもう息ぎれして鞴のように大きく肩をゆすりながら、舌を腕につけた。短い腕をゆつくりと肩から指さきまで舐めた。虫に食われたり、ジャングルの棘で刺されたり、傷痕の凹凸が舌のさきに山脈となつて感じられた。傷口のかさぶたが舌のさきに触れた。もともと食糧に塩分のないためか、汗も水つぽかつた。そのころ、食糧は六分の一定量がやつとになつていた。彼は百姓であつたから、兵隊にとられぬ前から汗をたらして働く経験はたれよりも多かつたが、その汗をこんな風に命がけで舐めるときがあろうとは、夢にも思わなかつた。伐木をしたり、野良で鍬をふるつたり、稲こきをしたりするときに、汗が流れて来て、眼にしみ、また口のなかに入つて来ることもあつて、汗の塩からさは知つていたが、いまここで吸う汗の味とはまつたくちがつていた。働いていた時分には、短軀ながら筋骨も堅かつたのに、いま自分の身体をしやぶつてみると、ぶよぶよと豆腐のように柔らかくたよりがない。また色も形もきたなく、虫のついた出来そこないの茄子に似ている。しかし、それはまごうかたもない自分の腕であつた。自分であつた。すると、自分が生きている、生きていたという感慨と、その自分の命に対するかぎりないいとしみの念とが、熱湯のようにどつと舌を伝わつて、胸の底へひびいて来た。

もう四十日にもなる執念深いマラリヤの熱はいくらか下り気味になつていたのに、またぶりかえしたように、身体中が焼けて来た。かるい眩暈をおぼえて、ふらふらとした。不意に走馬燈のように、屋根の傾いた家、中風で寝ている母、抵当にとられそうになつている田畑、牛小屋、四人の子供、妻、水車の臼、蚕棚、煙草畑、鎮守の鳥居、弟、――あらゆる故郷のことが頭のなかを去来し始めた。一緒くたのようでもありひとつひとつ別のようでもあつた。二人兄弟で、四つ年下の弟は自分よりも先に出征していた。どこか、ニューギニヤ方面にいるらしかつたが、消息はまつたく不明であつた。その戦地にいる筈の弟が、故郷の庭で麦をひろげた筵のかたわらに蓑を着て立つている姿がぱつと浮かんだ。望郷は遠い異国の戦場にある兵隊にとつては宝物のように切ない感情のひとつである。しかしこのごろではわざわざ考えだそうとしても、麻痺してしまつた頭では、なにか思いだしてもすぐに朦朧と消えてしまうのが常となつていた。こんなときこんな具合に浮かぶとは思いがけなかつた。しかもそのどれもがあざやかな色とにおいとを帯びていて、苦しいばかりだつた。田丸はそれらの重量を支えかねたようにたおれそうによろけて危うく屁つぴり腰でふん張つた。

ふと、五米ほど離れたところで、一人の兵隊が夢中に手の甲を吸つているのが、眼に入つた。一番仲のよい小宮山上等兵であつた。細面で、日ごろから色の白いのが、アミーバ赤痢にやられて以来、いつそうたよりなげな様子になつていたが、いま手の甲を吸つている小宮山の細い眼は眼鏡越しに、この日ごろ見かけたこともない生気をあらわしていた。いきいきとかがやき、唇をつけているところからぐいぐいと引きだされる精気が、しだいに身体に注入されてゆくようにみえた。あらわになつた肋骨の上を、荒々しい呼吸のたびに、黄色い皮膚が上下する。破れた靴のさきから、足の指がのぞいていたが、力をいれるたびにもごもご動いている。

それを見ると、田丸は不思議な衝動にかられ、おさえがたい狂暴な感情に前後を忘れた。激すると我を忘れる癖の田丸は、いきなり小宮山に飛びついた。ぶつつかられて小宮山はよろけた。おどろいてなにかいおうとするのにかまわず、両肩をぐつとつかんで、衝立をまわすようにくるりと背をむけさせた。肩をにぎりかえ、小宮山の汗ばんだ背をべろべろと舐めた。むつと鼻

の奥にしみる甘酸つぱい臭気とともに、塩からいものが舌に刺さつた。唇をつけて背を吸つた。生白い背に灸のあとが六つならんでいた。いよいよ激情を制しきれなくなつた田丸は、うしろから羽がいじめに小宮山に抱きつき、猪首をぐるぐるまわして、ところきらわず戦友の背を舐めた。くつ、くつ、とこみあげて来るものがあつて、いつか、わあわあと声にだして泣いていた。その声は自分の耳に入らず、泣いていることも、自分では意識していなかつた。小宮山の肩がふるえ、背がぴくぴくと痙攣したように動いていた。彼も嗚咽しているのがわかつた。田丸は自分の顔を戦友の背にぴたりとおしつけていた。洗濯板のような肋骨の起伏の上を舌が走つた。すると、背につけていた唇に、これまでとはちがつた塩からいものの流れこむのをおぼえた、それは自分の涙であつたが、彼はそれには気づかず、自分があまり強く吸つたので、そんな液汁が新たに戦友の体内からあふれ出て来たのではないかと錯覚した。彼は無我夢中にそのからいものをすすり、泣き喚きながら、友人とそこへ折り重なつてたおれた。彼はさらにはげしい眩暈を感じて、気を失つたが、なにか喚くような声とともに自分の背なかを生あたたかいものがずるずると駈けめぐるのを、ぼんやりと感じていた。

第二章　昆虫と悪魔

「印度公園」は、瀬振りから、敵陣地の方角にむかつて百米ほどの位置にあつた。

そこはちよつとした開濶地で、ゆるやかな斜面になつていたが、むろん、公園としての設備がなにもあるわけではない。今野軍曹の言葉を借りれば、ただ「景色がちよいとよい」というだけの話である。それに名も知れぬ密林の大樹とはまつたく変つて、そこには日本の赤松とほとんど変らない松林があつた。松には日本のにおいがある。これまでの戦線で、ほとんど松を見なかつた兵隊たちは、松の木に郷愁を感じた。赤い肌の松はひよろ高く、見あげる上方にいつて、はじめて枝を張り、梢を伸ばしていた。不思議と、松林はこの高台の一角にかぎられていて、霧がまだ消えやらぬ朝まだきや、谷底から霧が風に吹きあげられて来る暮れがたなどは、まつたく一幅の日本画であつた。今野中隊が任務を帯びて、ここへ瀬振りをかまえた当座は、兵隊たちはこの松林へ来ることをすこぶる好んでいたが、やがてたちまち遊歩客は閑散となつて、もの好きを笑われる田丸兵長ひとりになつてしまつた。

たれよりもしつかりした草鞋をはいた田丸は、爆撃と雨と任務以外のときは日に四度はこの、「印度公園」をおとずれた。草鞋をつくることは田丸のお手のものであつたので、兵隊たちに草鞋の編みかたを講習したし、自分のは特に念入りにこしらえた。大体、軍靴よりも戦争には草鞋の方がよつぽどよいのだと、負け惜しみでなくて、本気になつて主張したりした。芭蕉の広い葉をほそく裂いて、その繊維をはじめ二つにないあわせ、それを新たに草鞋に組んだ。足の指を上手につかつて、しごいたり、しめたりする手つきだけは、田丸に及ぶものはなかつた。指のはまるところや、踵のつくところは二重にも三重にもし、ぼろぎれでかがつて、緒は落下傘の赤い布を結びこみ、紅緑のだんだらにした。ぷんと青草の香がしみつく草鞋をはいて、田丸は「印度公園」へ行軍した。

ここはあたかも展望台である。台地の突端に立つと、左右に迫つた山々や、密林の間を透してインパール平原が一望の下に眺められる。しかも敵陣地の方からはまつたく隠蔽されていた。はげしい蟬の声が全山を煮ているように絶えなかつた。雨季が近づくにつれて、天候の変化は間断なく、眼下の風景も刻々に変貌していた。この位置から、盆地の脚へ出るまでには、七つの山と、十に近い渓谷とを越えてゆかねばならない。その間には敵の陣地がいくつかあるわけだが、いまはどちらも静まりかえつて、ときどき小競合いをくりかえしているばかりであつた。ただ、砲声は一日中鳴りひびき、爆音と爆撃のとどろきは、朝から夕刻まで絶えることなくつづいた。

松林から望むと、まず眼に入るのは、ロクタク湖である。その水の色の変化にともなつて、とりどりの光りかたをした。インパール平原といわれているのは、東西三十キロにわたるパト

カイ山脈中の一大盆地であるが、その中央からやや南寄りに、この湖があつた。ロクタク湖は湖というよりも、とりとめもない湿地帯のひろがりのように思われる。水際と岸との区別が明瞭でなく、乾季には陸となつて、水の部分もいたるところ渡渉でき、雨季には水中に没し去るらしい。大きな水たまりを見るように、広漠たる緑の平地のいたるところに水があふれてゆき、まつ白に光つている。湖の南端にいくつか島があつて、模型のように濃緑の壁をあらわして坐り、くつきりとさかさに水に形をうつしている。そこで水が終り、そこからまつ青な絨毯がひろがつて、また大小三つの柔らかな瘤のある小山がぽつかりと置かれてある。地図を見ると、ロクタク湖は眼前に見る水たまりよりはずつと広く、数倍の大きさに描かれてあつて、三つの瘤の丘は水中の島でなければならない。まだ本格的な雨季に入つていないので、水量不足なのであろう。地図ではモイランもニントウコンも水辺の部落であるが、いまはこんもりとした森にかこまれたそれらの部落は、いずれも水際との間にかなりの距離がある。ロクタク湖を隔てて、前方は峨々たる山脈が重畳し、黒味を帯びた青一色に沈んで、果てもなく南北に横たわつている。それらの山嶺のなかには、すでに数カ月にわたつて凄絶な攻防戦の展開されているバレルの戦場があるのであつた。

やがて、あわただしく変貌する空は、ぎらぎらと底なしに光る紺碧の色が消えて、暗雲がただよい始める。冷たい風が松林を騒がし始めると、ぱらぱらと雨の数滴が落ちて来る。雲と霧と雨とがしきりに交錯し、去来する。煙ると、盆地一帯はあたかも大海原のように見え、点々とある部落はいずれも樹木に包まれて、島のように見える。

左手の山脚にかすかにビシェンプールが望まれる。街はずれに三つの禿頭をならべたような赤茶けた高地がある。この三つ瘤の陣地では、いくたびか死闘がくりかえされた。数度とつたりとられたりして、鮮血にいろどられ、屍の山が築かれた。そこから管のように細い道が伸びだして来て結び瘤のように、ポッサンバム、ニントウコン、チニンゲイ、モイラン等の部落がある。ここからははつきりわからないが、ニントウコン部落の北端に近く、ロクタク湖に注ぐ一本の川があつて、盆地に於ける両軍の第一線は、その川をはさんで対峙している筈であつた。

砲声は絶えることなく、時折、島のような部落や、青海原のなかに土砂が吹きあがり、白煙が立つた。晴れたり、曇つたりして、一帯が白く霧のために煙つて来ると、ロクタク湖だけが浮きだして来るように、光を強め、それもまた煙り始めると、水面に一筋、銀の帯を投げたように、ややうねつて南北へ貫くものがあらわれる。マニプール川はこの湖に源を発しているので、すでに湖中に水脈をつくつているのかも知れない。マニプール川は印緬国境を縦断し、チンドウイン川にそそいで、さらにビルマを貫流するイラワジの大河に入る。

天候は一定せず、ある場所は照り、ある部落の上はそこだけ雲がかたまつて、紗の幕をたらしたように、雨が降つている。天がいくつもあるという感じで、そういう雨の幕が二つになり、三つになり、また一つになる。ビシェンプールと、モイランのま上に二本、雨の幕がたれているかと思うと、やがてそれは風にしたがつて、前後左右に移動する。その数本の雨の幕の間から、前方の山脈がかんかんと強い陽を受けて、青い壁をくつきりとあらわしているのが見え、その中間に足の長い虹が一つ立つ。雨の幕はいつかせりだして来るように山脚を登つて来て、「印度公園」をひとしきりすさまじい飛沫でたたいて置いてから、背後の山岳へ走つてゆく。

インパールは左方の山に遮られて望むことができない。ビシェンプールからインパールまで二十七キロ余、その間にブリバサーがある筈だが、それもここからは見えない。ビシェンプールの三つ瘤陣地の中間附近に砲兵陣地があるらしい。多くの砲門が一斉に火蓋を切るため、発射音と弾着音とがかさなりあい、なかに高射砲の水平射撃の音もまじつて、山間に谺する音が風の音のようである。部落のなかからまつ赤な火の手のあがるところがある。このような騒ぎは一日中絶えないのであるが、味方の陣営は静まりかえつていて、音がするといえば、ただ木臼や鉄兜のなかで籾を搗いている、ぽつと、ぽつと、というわびしい音がきこえるだけであつ

た。

飛行機は水中の魚のように、この平原を自由に飛びまわつて、銃撃、爆撃をくりかえす。十機編隊でやつて来る爆撃機は、悠々とモイラン上空を旋回して、まず先頭機が急降下する。ほとんど部落につつこむかと思われるくらい低空してから、ぐつと機首をたてなおして、飛び去る。そのあとにぱつと赤黒い火が炸裂し、しばらくしてから、地の底からおこるような、重々しい、鈍い爆音がひびいて来る。次の一機も同じように低空して爆撃する。十機とも正確に同行動をくりかえし、えんえんと燃えている部落をのこして、飛び去つてしまう。まるで演習であつた。一日数百機が上空を飛びまわるが、撃墜されるものは一機もなかつた。はるかに、メイミョウ、ラングーン、マンダレイ、等の後方基地を爆撃にゆく編隊が、これは見あげる高度を保つて、東南方の山脈を越えて消えていつた。

こういう風景を眺めながら、田丸兵長は、なにか放心したような、うつろな表情をしていた。モイラン、ニントウコン、「二六哩」（地名のないところは、インパールからの距離標識によつて、哩数が地名がわりにされていた。「二六哩」には重砲陣地があつた）「二八哩」、ライマナイ、サド、チラチャンドプール、などには友軍部隊や印度国民軍がいて、砲爆撃のたびに損害を受けているにちがいないのであるが、そういうことにはもはや関心は麻痺していた。そうして、この壮大な新戦場を眼下に見おろしながら、（とうとう印度までも来てしまつた）という、自分ひとりの命をいとおしむとぼけた感慨があるばかりであつた。それもひところのように強いものではなく、ふつとかすかに浮かんでは、気まぐれのように、すぐ消えてしまう程度である。

田丸兵長が「印度公園」へ毎日出勤するのは、展望台から、インパール平原を俯瞰するためではなかつた。彼は戦場を鳥瞰して戦況を大観し、作戦を練る必要もなければ、興味もない。もつと、ほかの楽しみがあつたのである。団栗兵長は例によつてお役目のように眼下をひとわたり展望してから、くるりとふりむいて、草鞋の足音を忍ばせながら、彼のほんとうの目的の場所に近づいていつた。松の木の密集した北寄りの斜面に来て立ちどまつた。鈍くにごつた眼に急に活気をあらわして、地面の一部を見つめると、そつとそこへしやがみこんだ。それから、腰をおろすと両肱を膝頭にのせ、右手を口にあてて無意識に爪を嚙みながら、ぐつと背を曲げ、地面の一点を凝視し始めた。

五尺そこそこの田丸がそうやつてうずくまつていると、なるほど団栗のとおりである。顔も丸く、鼻も団子鼻で、痩せはしたが、身体のつくりがなにからなにまで丸つこい感じで、どこか愛嬌があつた。またその体軀からは鋭さというものはすこしも感じられず、その鈍骨な様子や動作は彼が歴戦の勇士であるにかかわらず、いまだに兵長でいることとぴつたりと一致していた。中隊長代理の今野軍曹とは同年兵で、どちらも三十一歳、中国の戦場以来ずつと一緒であつた。小宮山上等兵は彼よりは二つ年下ではあるが、戦歴はたつた一年で、すでに彼に追いつこうとしていた。人なみに虚栄心もある田丸はこのことが残念でたまらず、なんとかして昇級しようと苦心もしてみたのであるが、生来の鈍重さはいかんともすることができず、あせればあせるほど、失敗の種となつた。黙々と野良で土としたしみながら働いて来た田丸は、お世辞をいつたり、人の機嫌をとつたりすることも下手で、要領のよい後輩たちにたちまち追いぬかれた。軍隊ほど要領の必要なところはない。日ごろは鈍重な癖に、なにか昂奮すると、かつと激情に駆られて、上官にでも食つてかかるようなこともあつて、もはや彼が万年兵長たることは自他ともに許しているところであつた。またすこし吃りで、話し下手なので、仲間たちの談話に加わることもあまり気がすすまず、戦友たちが賑やかにしているときでも、すこし離れたところで、ひとりで銃の手入れをしたり、洗濯をしたり、草鞋を編んだり、虱をとつたり、ハリハルに手つだわせて、ジャングル野菜をきざんだり、とうきびの蕊を乾かしてつぶしたり、鉄兜のなかで籾を搗いたりしていることが多かつた。別にのけものにされているわけでもなかつたのだが、そうしている方が自分で気が楽だつたのだ。こういう彼にとつて、たつた一人で

「印度公園」で時間を過ごす楽しみのできたことは、なによりもありがたいのであつた。

田丸兵長の凝視している場所は、ちよつと見ると普通の地面で、なんの変哲もあるようには見えない。赤土の台地には、まばらに雑草が生えていたが、田丸が瞳を投げているところにも、一尺ほどに伸びた一本のうす緑色の草があつて、その根からまた小さい葉が二本出ていた。笹に似ているが、笹ともちがい、なにかわからなかつた。わずかの風にもそよぐくらい弱々しい草である。台地には同じような雑草がいたるところに生えていて、特別に注意を惹くなにものもなかつた。その草の根もとに田丸の瞳は吸いつけられている。

根のところに細い穴があいていて、そのまわりを、四、五匹の蟻が這つている。時折、その穴に入つたり、出たりする。せかせかと忙しそうである。穴の周囲は粟粒のような土でやや高く盛りあげられていて、そのうちの二匹は穴から運びだして来た土粒を、その土堤の上に積みあげる作業をくりかえしている。田丸兵長はその小さな穴と蟻の動作とを一心に見ているのであつた。ときに微笑を浮かべたり、おやという顔をしたり、口を尖らして鹿爪らしく考えこんだり、また、ときに、満足そうにふんふんとひとりでうなずいたりする。飛んで来る蚊や砂蠅を無意識のように手ではらう。ぱちんと手や腕の蚊をたたいたり、ぽりぽり掻いたりする。天気であれば、午前二度、午後二度、距離延八百米、馬鹿の骨頂と笑われながら、田丸兵長がむだな行軍をつづけていたのは、まつたくこの蟻のためなのであつた。兵隊たちが陰気な瀬振りで退屈しているとき、田丸はこの「印度公園」でひそやかな楽しみにひたつていたのである。蟻の穴を発見した当初は、さして気にもとめていなかつたのに、いまでは、憑かれたようにこの高台で時間を過ごすようになつたについては、とりたてて特別な理由もなかつた。なによりも退屈であつたし、見ていると面白かつただけのことである。無論故郷にいたときには、蟻などに見むきもしたことはなかつた。しかし、ときどきは、ふつと、この人間たちが日夜死闘をくりかえしている凄惨な戦場のまつただなかで、無心に、営々として働いている昆虫の姿が、なにか説明のしようもないある感情をともなつて、胸にしみて来るように思われることがあつた。雨のために育つのか、穴の入口にあつた草は、はじめは五寸ほどであつたのが、見る間に一尺近く伸びた。毎日、蟻の穴を見物しているうちに、田丸は、さまざまの生態と変化とを示す昆虫の世界にしだいに惹きこまれていつて、しまいには、みずからの感情や、思考や、行動までも、蟻のために支配されるようになつた。

蟻は入口の草がいくらか迷惑の様子に見受けられた。草は上に伸びるとともに、その根もはびこらしていたので、入口はそのために閂をかけられたようになつた。出入りにも不便であるとともに、獲物を引きこむときにはさらに難渋を来たしていた。田丸が一番はじめにこの穴を見つけたときには、一匹の蟋蟀がこの穴のなかへ引きこまれようとしていた。二分たらずの茶褐色の小蟻が数百匹、こおろぎの頭、肢、翅、胴にまつ黒にたかつてぐんぐん中へ引きずりこんでいつた。閂のようになつた草の根にはじめは閉口している風であつたが、それをこおろぎの身体で穴の縁へおしつけ、ほとんど穴一杯の獲物をいつか尻の方からかつぎこんでしまつた。ほほうと田丸は思わず感歎の吐息をもらした。

かゆい鼻の穴をほじくりながら、ちよつと思案したのち、彼は斜面の草原に降りて、こおろぎを探した。足音をきいて、黒豆のはじけるように、何匹もこおろぎが飛んだ。一匹をつかまえると、地面にたたきつけ、その屍骸を持つて穴のところへかえつた。前のをすつかり引きこんでしまつて、穴のまわりは閑散であつた。田丸は穴の横にこおろぎを置いて、じつと様子をうかがつた。やがて、穴から出て来た一匹がこおろぎのところまで来て、肢にちよつと触つたかと思うと、いきなりくるりとふりむいて、一散に穴のなかへ駈けこんだ。十秒と経たぬうちに、穴のなかからぞろぞろと数百の小蟻が出て来て、こおろぎに群がつた。数千であつたかも知れない。頭、翅、肢、胴をそれぞれにくわえ、胴の上に上がりこむのもあつた。やがて、まつ黒にたかつた小蟻によつて、こおろぎは穴の方へ動かされ始めた。御輿をかついでいるのに異

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com